発行所（郵便番号100）
東京都千代田区丸の内2－4－1
丸ノ内ビルデング617号室
社団法人スウェーデン社会研究所
Tel（3212）4007・1480
Fax（3212）1447
編集責任者　岡沢憲芙
印刷所　関東図書株式会社
定価200円（年間購読料参千円）
1992年4月25日発行
第24巻　第4号
（毎月1回25日発行）
昭和44年12月23日第3種郵便物認可

スウェーデン社会研究月報

Bulletin Vol. 24　No.4

Japanska Institutet För Svensk Samhällsforskning
(The Japanese Institute for Social Studies on Sweden)
Marunouchi-Bldg., No.617. Marunouchi, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan.

スウェーデン教育における自由化の動向

Liberalizing Trend in Swedish Education

顧問　早稲田大学教授　中嶋　博
Adviser, Prof. Hiroshi Nakajima

丁度1年ぶりにスウェーデン他北欧4か国を訪れる機会をもった。

折しも、北欧理事会がヘルシンキで開催され、招かれたコール独首相が北欧のＥＣ加盟歓迎を表明、フィンランドが加盟を決定した。

ＥＣからＥＵへ、今北欧は大きく揺れているが、教育界も同様で、改革を迫られ、一種の混乱状態にあるが、顕著な動向としては、“自由化”を読みとることが出来る。

それはストックホルム大学東洋語学教室（主任 Prof. Gunilla Lindberg－Wada）の講義では、臨教審・中教審答申に関心が寄せられたこと。またウップサラ大学教育学教室（主任 Prof. Urban Dahllöf）の講義で、昨春の王立科学アカデミーの講演の際は、遠慮がちに話した私学化に大きな関心が払われたことによっても分った。

事実スウェーデンでは、審議会答申“自由な大学”が出され、ウーメオ大学、シャルマール工科大学などが私学になろうとしている。

しかしそれ以上に驚いたことは、昨年までは想像も出来なかった事実を知らされたことであった。それは学校庁（Skolverket）の研究・開発担当のProf. Erik Wallinより、1日平均2件の私学の申請が出され、バウチャー制も検討されているとのこと。

実は、これはフィンランドも同じで、3月13日に国会上程の学習指導要領改訂案が公表されたが、学校の管理をより自由にし、英語を必修とするというものである。

ノルウェー、デンマークも相次いで学習指導要領を改訂しているが、これは北欧閣僚評議会の“学校の管理”勧告に基づくものであり、自由化を強調したものである。

現地の人は、日本の挑戦を受け、それに答えているだけとしているが、筆者には、日本の現状を省みて考えさせられた。

すなわち、移民の子女へのいじめなどは結構あると聞いたが、青少年は至って健全で、落書きも減り、書店では非行のハンドブックなどバーゲン・セールに付せられていた。

また日本の新幹線にヒントを得たという超特急X2000は、アメリカにも輸出されるが、“タイム”誌をはじめ各種海外雑誌も揃え、ファックスも自由に利用出来る上に飲物付き上等な食事のサービスもある快適なもの。

さらに58,000トンのシルヤ・ラインの新造船はストックホルム～ヘルシンキ間を30分短縮したのみならず、子どもの遊び場・保育室が従来以上に整備されたものとなっている。

そしてスウェーデンで2月27日に告示された高校の新学習指導要領は、徹底した職業教育を行うものとなっており、我が国と全く逆である。

目　次

スウェーデン教育における自由化の動向
……中嶋　博…1
国立か公立か　—12条ホームの行方—
……坂田　仁…2
お知らせ・研究会報告……3
国民高等学校難民クラスに留学して
……山井　和則…4
女性が働けるスウェーデン…金井ユキエ…5
ＳＩＰニュース・訂正……6

国立か公立か　—12条ホームの行方—

常磐大学教授　坂田　仁
Prof. Jin Sakata

昨年機会があってスウェーデンにしばらく滞在していた。その時に以前からの希望が叶い、レヴスタの12条ホームを見学することができた。そこで見聞したことを、筆者の過去の経験と照らし合わせながら、一文に綴ってみたいと思う。

レヴスタは1930年代のスウェーデンにおける非行少年処遇の方法をめぐる激しい議論の中から生み出された施設である。それは、具体的には体罰の可否をめぐる議論であった。その詳細をここに伝えることは、筆者の知識の不足からできないのが残念であるが、その結末のひとつがレヴスタの設立であった。地方自治の伝統の極めて強力なスウェーデンにおいて、実に例外的に、この施設は設立の当初より国立の施設であった。

20世紀は児童の世紀といわれる。いうまでもなく、この表現はエレン・ケイから取ってきたものである。ケイはその著「児童の世紀」の中で体罰を激しく非難している。「わたしの言おうとするのは、良心的で愛情深い両親と教師の実行する打擲についてだけ」であり、「打擲を必要とするのは奴隷であって、それは自由な人間の道徳ではなく、「自制心の不足、叡智の不足、忍耐の不足、品性の不足、これが打擲システムを支える四本柱である。」というのである。（小野寺信・百合子共訳、「児童の世紀」による。）

「児童の世紀」の出版の前19世紀の中葉から世界各地に感化院の設立が相次いでいる。それを支えたのは、ヨーロッパにおいては教会を中心とする慈善団体であった。私達はラウエス・ハウスという施設を、その設立者ウィヒェルンとともに記憶している。このラウエス・ハウスの直接の影響下に1840年にスウェーデンのルントにロービューという感化院が設立されている。キリスト教の信仰を基本として、スコーネ地方の要保護児童を収容保護したのである。日本で留岡幸助が巣鴨に家庭学校を設立する50年前のことである。ロービューは私立感化院で、その特徴は地方性と宗教性とここでは表現しておきたい。そして、その運営規則の中には院長による鞭での体罰が規定されていたという。

児童の世紀の主張は、この感化院の体罰システムと真正面から衝突したのである。宗教的信念に基づく非行児童の鞭を伴う教育改善に対して、科学的原理に基づく非行少年の処遇が主張されたといってもよいであろう。児童精神医学の専門知識を活用して、非行少年の非行化の原因を探り、適切な処遇を行うことが重要視されるのである。レヴスタはこの時代の要求を背負って誕生したのである。レヴスタの特徴を、国立で、科学主義と表現してもよいのではないかと思う。

1950年代は「福祉社会」という言葉をスウェーデンが生み出した時代である。世界にその名が轟いた時代といっても過言でないかもしれないと思うが、その末期に児童福祉法は新しい装いを得ている。1960年の児童福祉法である。この中で少年福祉学校は正に科学主義にのっとって非行児童に対して保護を提供したのである。レヴスタが私の脳裏に刻みこまれたのはこの時代であった。

1980年代は社会サービス法の時代である。その特徴のひとつは社会福祉のすべての領域から強制の要素を排除することであった。少年保護と薬物乱用者保護とが難問であった。どちらについても任意保護を前提としながら、強制保護も残されることになった。同時に、地方自治の伝統がすべての少年福祉学校の地方移管を実現した。これによって1950年代に国立化されたロービューは再びスコーネの地方的施設になり、レヴスタは国から所在地のコムーンに移譲された。その結果はどうであったかというと、ロービューはそれを歓迎し、レヴスタは歓迎しなかったのである。

昨年私がストックホルムに滞在している時、12条ホームの国立化をめぐって国会と政府とが対立しているという話を聞いた。そして、12条ホームが今年中にあるいは国立化されるかもしれないという状況になっていたのである。この議論は、現在の時点でも活発に行われていると思う。

この関連で私が思いだしたのは日本の教護院の施設体系である。日本には、国立の武蔵野、鬼怒

川の両教護院、私立の北海道家庭学校と横浜の家庭学園、それに各都道府県に1ヶ所以上の公立の教護院が並存している。このシステムによって日本では意外に柔軟に非行児童のニードに合わせた処遇が可能になっているのではないかと思うのである。それぞれの施設にはそれぞれ設立の事情があり、それをある程度尊重して初めて、処遇の実が上がってくるとも考えられる。一律にことを運ぶというのは、スッキリしている割に効果の上がらない面があるのかもしれない。

一神教になれた人々はひとつの問題に複数の原理があると、その一つを選んで絶対とし、残りを放棄する傾向があるのかもしれない。一方多神教になれた人々は、複数の原理すべてを使い分けようとする傾向が強いのかもしれない。しかし、その是非を論じることは難しすぎて、私の手には負えない。

お知らせ

スウェーデン首席国会オンブズマン、クラース・エークルンド来日

来る5月15日から23日にかけてスウェーデンの首席国会オンブズマン（JO）、クラース・エークルンド氏が来日いたします。スウェーデンは1809年に世界で最初にオンブズマン制度を導入した国として知られております。国会オンブズマンは中央、地方の政府機関を監察し市民の権利を守ることを職務としています。これまで、スウェーデンからは報道オンブズマン、男女平等オンブズマン、消費者オンブズマンなどの来日はありましたが、オンブズマンの語源ともなった国会オンブズマンの来日は今回が初めてです。4人いる国会オンブズマンの中でエークルンド氏は首席の地位を占めています。

滞在中には最高裁判所長官、衆議院議長、総務庁長官等の表敬訪問や学識者との意見交換、総務庁、早稲田大学現代政治経済研究所、日本弁護士連合会、神奈川県自治総合研究所などでのセミナー、日本記者クラブでの記者会見を予定しております。

クラース・エークルンド Claes Eklundh

スウェーデン首席国会オンブズマン略歴

1939年　生まれ。

1968年　南部スウェーデンを管轄する高等裁判所で判事補として裁判官歴を開始。

1970年　スウェーデンの新基本法（1975年施行）を立案するための政府の立法関係委員会の幹事に任命される。

1974年　法務省の参事官となる。

1977年　総理府の法制局長に任命される。この職に1985年まで在任。

1985年　労働裁判所の裁判長に転じる（同裁判所には3人の裁判長がいる）。

1987年　十一月一日より首席国会オンブズマンの現職にある。なお、人権に関する事項を検討するための、いくつかの立法関係委員会にも専門員として関与。

《研究会報告》

去る3月31日（火）、当研究所において講師に北海道東海大学教授、武田龍夫先生をお迎えして研究会を開催した。

今回は「北欧三国王家王制概論」というテーマで北欧各国の王制及び王家の歴史的な形成と特徴、また、社会に対する各王家の発言力や仕事の内容、責任、財政などについてよく知られた君主を例に取り上げて、エピソードを交えながら話された。

また、式部官時代の体験から日本の皇室との相違点についても判り易く解説して頂いた。

北欧の各々の社会に長い伝統を持ち、国民に受け入れられ溶け込んでいる王制や王家について興味深く楽しい講演をして頂いた。

国民高等学校難民クラスに留学して

Immigrant Class at Folk High School

京都ボランティア協会職員　山井和則
Mr. Kazunori Yamanoi（ルンド在住）

スウェーデンに来て、8か月がたった。この間に、自分自身が一番変わったのは、人種差別、正確に言えば難民問題についての考え方だ。

私は、昨年の8月から年末まで、ベクショー市（スウェーデン南部）のシグフリッド国民高等学校（folkhögskolan）難民クラスでスウェーデン語を学んだ。クラスメート（10人）の平均年齢は20歳。エチオピア、エリトリア、ソマリア、ベトナム、イランなどから来ている。私以外は全員、「祖国では命が危ない」という政治難民ばかり、平和な島国で育った自分にとっては、カルチャーショックだった。スウェーデンは、毎年約1万人の政治難民を受け入れている。ただし、「ただ単に貧しいから」という経済難民は受け入れていない。

日本にいたときには、「難民問題は別世界の出来事」と思っていた。学校が始まる前にも、「生活習慣や価値観も違うだろうから、難民と友達になれるだろうか」と悩んだりした。なにぶん、最初はスウェーデン語がまったく話せなかったので、8月16日の授業開始を緊張して迎えた。しかし、いざ接してみると、難民の1人1人はまじめで、善良な人間が多い。クラスも寮生活も楽しかった。そして、「政治が悪い、独裁者が悪い、のであって彼らは被害者なんだ」と気づいた。このことが日本にいたときにはわからなかった。

いつも冗談を言いながら、ワイワイ騒いでいたので、クラスメートを私は特に「難民」という目で見ていなかった。しかし、昨年の11月と12月に、たて続けに2人のクラスメートの父親が内戦で死んだ。これは、ショックだった。エチオピア出身のムセとソマリア出身のサジャの父親だ。両国とも内戦が激しく、いま世界で最も貧しいと言われる国だ。2人の落ち込んだ姿を見て、私も泣けてきた。平和な日本に育った私には信じられない現実だった。

先日、ある日本の雑誌から国際電話で質問を受けた。「イラン人が近所に増えて困っている。下着も外に干せない」という読者からの投書が来ているが、それに答えてほしいと言うのだ。イラン人が下着を盗むんじゃないかと恐れる日本人。ホントに驚いた。トンデモナイ話しだ。仲のいいクラスメートのヒルミ（イラン出身）の笑顔がふと思い浮かんだ。「私はイランからの難民と一緒に勉強しているが、彼らの多くは平和を愛する善良な人間だ。中には悪人もいるかもしれないが、それはどこの国民も同じだ。この国際化時代に、こんな偏見が残っているのは、先進国で日本だけじゃないか。日本人の人種偏見はヒドイ。友人のイラン人たちに、このことを言ったらきっと怒るだろう」というような内容の答えをした。

私が、こんなに難民に親近感を感じるのは、やはり、スウェーデン語という共通言語で彼らと直接話し、情が移っているからであろう。その意味では、イラン人やいわゆる外国人労働者と直接会話ができない一般の日本人が、彼らを恐れるのも仕方ないのかもしれない。

スウェーデンでも最近、一部で移民排斥の運動が起こっている。しかし、それに対してはカールビルト首相や国王が先頭に立って若者たちと一緒に「人種差別反対」のデモ行進をしたり、中学校や高校でも人種問題を考える授業が頻繁に行われている。

国民高等学校の寮は男女混合、もちろん難民も一緒。男性の難民たちとスウェーデンの女子学生が隣同士の部屋に住んで、晩遅くまで語り合っている。つくづく「日本では考えられない」と、うなってしまう。

私は高齢者問題からスウェーデンに興味を持ち始めた。しかし、今では「3つの平等」という3次元の立体的な視点がスウェーデン理解に不可欠だと思っている。世代間（高齢者と若者）の平等、男女の平等、そして、人種の平等。特に、人種の平等にスウェーデンの理想主義がもっとも如実に表れているように思う。

女性が働けるスウェーデン

Vividly Working Women in Sweden

会員　金井ユキエ
Ms. Yukie Kanai

1991年の秋スウェーデンを訪れた。女性だけの研究班で文部省の補助事業によるものであった。「福祉社会の成熟と働く女性の環境」をテーマとしていた。

働き続けたいと願う女性は日本にも多い。とはいえ女性が仕事を継続するうえでの困難は少なくない。そこで今回見聞した中から多くの女性が働き続けているスウェーデンの働く女性を支えている社会環境の一端を述べてみたい。

周知のようにスウェーデンでは男女機会均等法などにより女性が男性と同等に働く権利が本来的に保障されている。

それでも出産や育児は女性にとって容易なことではなく、まして働きながら出産、育児をむかえるとなるとその困難さは大きい。その点スウェーデンの育児休業制度は充実している。女性、男性ともに子どもの出産に際して450日間の休暇がとれ、その間所得の90％を補償される。この育児休業制度は1974年に制定され、18年を経た現在まで100％消化されているという。最近ではその約1/4が男性により取得されている。訪問先への途上の地下鉄やバスの中、あるいは図書館、博物館、大学構内などで乳母車を押す父親の姿を多く目にした。育児休業制度の現れであろうか。

育児休暇後は職場復帰の制度が確立されている。休暇前と同程度の職場と給与が保障される。これは羨ましい。

さらに幼児を持つ親の場合労働時間を1日6時間に短縮することもできる。所得の補償こそないが子どもが8歳に達するまで有効で、育児にかかわる時間をより多く持てる。

また働き続ける親にとって保育所は重要である。保育所の開始時間は午前6時と親の多様な勤務時間に対応可能なように設定されている。保育所の設備や保育内容、子どもに対する先生の人数など親が安心して働けるように配慮が行き届いている。

このような制度の加えて女性も意識してさらに〈仕事の質〉を高める努力をしている。

育児休業中や教育休暇制度を利用して勉強に取り組む女性も多い。就職後もっと専門性をつけたい、または今の仕事とは直接関係ないが別の勉強をしたい、資格を取りたいという場合雇われた状態で勉強できる教育休暇制度がある。この制度を利用すると職場復帰が可能で以前よりよい仕事に移れる可能性も高い。

多様な年代の人々が社会のシステムとしての追加教育を無料で受けられる。

「ストックホルム大学で民族学を勉強している。続けることは大変だが一学期20ポイントとれる」

「子どもが小さい時に人事関係の学問と行動関係学を勉強してきた」

「経営学を勉強していてこれからの転職に備えている」など上位の職種を目標に定めて日々研鑽している女性たちに出会った。

このようにスウェーデンでは女性が容易に働けるように、社会の制度や機構が整備されている。

一方女性自身も積極的に仕事に取り組んでいる。一般企業はもちろん政界、国や自治体の諸機関で活躍している女性は非常に多い。大型バスを2台つないだ乗り合いバスの運転、夜間のタクシー運転、列車の連結作業などに従事する若い女性さえ見られた。

労働市場庁で女性の深夜業について質問をしたところ昔は禁止されていたが男性だけが給料のいい仕事をするのは不公平、他国よりは労働条件が整っていていい仕事と思っている女性が多いとの説明であった。スウェーデンでは1962年に女性の夜間就労禁止の規定が取り払われている。

社会の情勢の変化により日本でもいずれはいまより多くの女性が働くようになろう。現在就労している女性はもちろん一度家庭に入った女性が働きたいと願うときにはスウェーデンの働く女性の環境はわれわれ日本人にとって参考になる。わたくし自身も女性がいきいきとして働ける場をつくるための方策を模索している。

〈SIPニュース〉

スウェーデンで開発された、あらゆる車向けの無鉛ガソリン

1月中旬、スウェーデン生協グループのメンバーであるOKペトローリアム（OK Petroleum)が、あらゆる車の仕様に適したニュータイプの無鉛ガソリンを発表した。販売が開始されているのは今のところストックホルム、ヨーテボリ、マルメの三都市で、それらはOK市場の約40%を占める。ただし、今世紀末までに、新タイプガソリンOKオプティマ（OK Optima)が、全国的に使用されるものと見込まれている。

オプティマの場合、鉛のかわりに特別開発の添加物が加えられており、これらのうちの一つは、ソジュムを含み、バルブや弁座といったエンジンに不可欠なパーツの円滑化に役立つ。もう一つの添加物はすすその他の沈着物を除去すると同時に、燃焼を促進する。

包括的なテストはオプティマを使った際のエンジン駆動が効率的で、有鉛ガソリンと同程度の寿命を持つことを実証した。OKペトローリアムはまた、エンジンから鉛の残滓を取り除くために普通のガソリンに使われている不純物除去剤を排除したが、これらの添加物は燃焼時にダイオキシンを形成することが知られている。

OKの新ガソリンは触媒変換装置のついていない車やこれまで有鉛ガソリンを使っていた車向けのオプティマ96とオプティマ98の他、触媒変換装置付の車や既に無鉛ガソリンを使用している車を含むあらゆる車に適する無鉛95オクタンガソリンがある。

現在、有鉛ガソリンを入れているスウェーデンの360万台のガソリン車のうちのおよそ150万台は、燃焼をオプティマに変えることが可能であるが、十分に機能させるためには有鉛の添加物を要する旧型エンジンを搭載している車もまだ数多く存在する。なお、他社の98オクタンガソリンにはパーツの円滑化効果がないということである。

鉛やダイオキシンは、長い間、健康や環境に重大な害を及ぼすことが知られており、とりわけ、子供達は有毒な薬剤の影響を受けやすい。ダイオキシンは極めてゆっくり分解し、妊娠中の女性の体内に入った場合、応々にして胎児にまで影響が及ぶ。ダイオキシンは発ガン性を有し、人間の免疫システムに影響を与える。 (SIP 019/92)

ウーロフ・パルメ賞、国際アムネスティへ

国際的相互理解並びに共通の安全保障のためのウーロフ・パルメ記念基金の発表によると、1991年度ウーロフ・パルメ賞は国際アムネスティ（AI)に贈られることが決まった。同賞の賞金額は15万クローナ（345万円）で、パルメ氏の誕生日である1月30日に、ストックホルムで行なわれる受賞式で授与される。

ウーロフ・パルメ記念基金は、世界の人権を擁護するためのAIの忍耐強く、献身的な作業に言及し、150以上の国々の同組織グループの粘り強い努力が迫害を受けている多くの人々の命を救い、かれらが再び自由を獲得する手助けを行ってきたとした。また、AIは、独特の方法で、基本的人権のための重要な闘争と個人のために有効な作業とを合体させたとも同基金は述べている。

同基金は暗殺されたウーロフ・パルメを記念するために元首相の家族とスウェーデン社民党によって設立された。かつての受賞者の中には元国連事務総長のペレ・デ・クエヤル（Pérez de Cuélla)やヴァクレーヴ・ハベル（Vaclav Havel)、S.O.Sレーシズム（S.O.S Recisme)とその設立者ハーレム・デジール（Harlem Desir 仏）等がいる。 (SIP 014/92)

1991年度のインフレ率は8.1%、本年度予想では2.2%

中央統計局によると、1991年度のスウェーデンのインフレ率は8.1%であった。このうち4.8%は住宅コストの上昇によるものであるが、その半分が1991年度に実施された税改正によるものである。

改正の物価への影響は総じて3.3%と見込まれている。食品価格は同年中に2.3%の上昇を示したが、これは1968年来で最低の年間上昇率であった。間接税及び臨時税の影響を除いた消費者物価を測定する実質物価は1991年度中に5.2%の上昇を示した。

物価競合庁は1992年度に消費者物価が2.2%の上昇を示すものと予想している。なお、昨年度1、2月は、インフレ率が急激に落ち込むことが予想される。なお、本年1月より、食品及び特定のサービスに対する付加価値税がひき下げられた。 (SIP 037/92)

《訂正》

前号月報に誤りがありました。ここに訂正させて頂きます。

ご迷惑をお掛け致しましたこと心からお詫び申し上げます。

P1 バブ → パブ

第三種郵便物認可 昭和44年12月23日
スウェーデン社会研究月報 平成4年4月25日発行 第24巻 第4号
毎月1回25日発行 編集責任者 岡沢憲芙 発行所 社団法人スウェーデン社会研究所 定価二〇〇円